

和田東郭の腹診における表現について

大道寺慶子

University of Westminster

臨床における感覚がどのような言葉で表現されるかという問題は、施術者と患者双方の身体感覚について疎通をはかるうえで重要な意味をもつ。本研究は、その一例として江戸時代の医家・和田東郭(1743~1803)が、腹診について語る際に使用している比喻表現とオノマトペを取り上げる。東郭の医学は、おもに後世派を以て古方派を補うという形をとり、折衷派とみなされる。優れた臨床家であったらしいが「心得の妙機」は言葉や文字では伝えられないとして、自身で著作を残さなかった。したがって現在、東郭の著書とされるものはすべて東郭の口授、または口述を門人が筆記したものがもとになっている。その代表的なものうち『蕉窓雑話』(1824)と『傷寒論正文解』(1837)におけるオノマトペの使用については先行研究がある(守山恵子。「体の状態をあらわす擬態語」について——『蕉窓雑話』の場合——。国語と教育：1996: 21: 24-32など)。本研究は音韻によって表現される身体感覚への着眼に啓発を受け、オノマトペに加えて腹診における感覚についての表現全般を考察の対象としたものである。

東郭は、診察の法は書面でマニュアル化できるものではないので「一芸にこりかたまりて習熟すべし」、ことに腹診は「自己の腹中を以て按じ候ひ可見、自己の工夫なくしては成がたきもの」であり、自分で工夫し感覚をつかむことが肝要だと述べている。一方で『蕉窓雑話』には、門人による注意書きとして、東郭は門人に対して「通曉し易きが為に俚言を避ずして」教えたので、敢えてそれに手を加えず、そのままを書き記したとある。東郭が腹診の手法・診断について語った部分をみると、自身の経験則や主観的感覚を、経験が未熟な者(=門人)に対して、実に様々かつ独特な言い回しを駆使して伝えようとしたことがわかる。

表現の考察においては、『蕉窓雑話』の他に『腹診録』『腹診後録』『東郭診腹一家伝』といった腹診書を中心に使用する。腹診・腹候の説明には、もちろんのことだが「おす」「按ず」「なでる」や(腹内で)塊が動く/動かない、痞の有無といった簡潔な表現が多数を占めるが、それだけではない。見つけた比喻表現とオノマトペを分類すると、①腹診のやり方を説明する際に使われているもの、②腹候を説明する際に使われているものに分けることができる。①は自らの手の動かし方(=能動的な働きかけ)についてであり、②は受動的な感覚についての説明といえる。①には例えば「臍の辺までそろそろと手の平にて按じなでて見て」「くっとおす」などがあり、②には、例えば妊娠している腹の動き方は「袋中に鼠を入れ、袋の口を閉めて鼠をおすよう」、又は「たもとへ手を入れて上からおさえ、下で手を動かすよう」であるという。この他にも「ふはふはと麩のような腹」、「臍のあたりに任脈通りに箸を伏せたように筋が立つ者」等の使用例を挙げることができる。総じて腹診における手の動かし方においてはオノマトペが多用されているのに対し、腹候の感じ方については、鼠・麩・箸といった当時の人々の日常に身近なものが譬えに用いられている場合が多い。

こうした口語で用いられたオノマトペや比喻表現の考察には二つの意義がある。第一は、ある時代の臨床・および教育現場において共有された身体感覚へのイメージーションを明らかにすること、第二には江戸医学において、漢語ならば「虚・実・浮・沈」などで表されるような触覚の表現が、いかに口語の日本語に咀嚼され伝達されたかという一例として着目することである。